

【作品介绍】 旧二条離宮（二条城） 本丸御殿の障壁画 御常御殿、台所及び雁の間

中野 志保

はじめに

明治二十七年（一八九四）に、御所の北側にある桂宮家の御殿（以下、桂宮御殿）の主要部を、二条離宮の本丸に移築して完成した、現在の本丸御殿（本誌掲載の松本直子「作品介绍」旧二条離宮（二条城 本丸御殿の障壁画 玄閣、御書院」¹図1参照）は、玄閣、御書院、御常御殿、台所及び雁の間の四棟から成り、部屋内には紙本や絹本、廊下には杉戸に描かれた障壁画がある。本稿は、そのうち、御常御殿、台所及び雁の間の障壁画について、各部屋の画題、技法、様式、筆者を紹介するものである。なお、各部屋の障壁画の筆者は、『京都御所離宮誌』（宮内庁蔵）及び、宮内省の式部官や宮内大臣秘書等を務めた長崎省吾（一八五〇～一九三七）関係文書『桂宮』²に依拠することとする。

はじめに、建物の建築年代と、障壁画の制作年代について、先行研究の成果を確認しておきたい。移築前の御常御殿、台所及び雁の間を含む桂宮御殿の整備は、弘化二年（一八四五）から始まった³。この時期は、桂宮家十代当主節仁親王（一八三三～三六）が没した天保七年（一八三六）以降、文久二年（一八六二）に、孝明天皇（一八三二～六七）の異母姉、敏宮淑子内親王（一八二九～八一）が一代当主となるまでの間、空主の時代にあたる⁴。このうち御常御殿は、嘉永元年（一八四八）十一月二九日に地鎮祭が行われ、少なくとも嘉永二年（一八四九）一二月以降に竣工した⁵。台所及び雁の間の建築年代は特定されていないが、移築前は玄閣近くに配置されていたため、「御車寄・御玄閣等」⁶は、立柱が弘化五年（一八四八）正月三日、竣工が嘉永元年（一八四八）九月以降とされていることに鑑みると、そこからあまり隔たらない時期の建造と推測される。桂宮御殿全体の整備が完了した時期は特定されていないが、嘉永七

年（一八五三）四月六日に起こった御所の火災により、同月一日から安政二年（一八五四）一月二三日まで、桂宮御殿は仮御所となっていたことから⁷、嘉永七年（一八五三）四月一五日までに竣工していたことは確実である。

障壁画の制作年代について、武田恒夫「本丸御殿障壁画」（『元離宮二条城』小学館、一九七四）では、桂宮御殿の整備が完了したと目されてきた弘化四年（一八四七）説が採られていたが、上述のとおり、嘉永元年（一八四八）以降も整備が続けられていたことが明らかになったため、再考を要することとなった。まず御常御殿について、西和夫、津田良樹、小沢朝江「二条城本丸旧桂宮御殿の造営と障壁画について―桂宮家御殿の造営と御出入絵師（一）―」は、『桂宮日記』の記述において、「文久二年二月五日、鶴沢探真、中島来章名代の中島有章、原在照名代の葉多在周、狩野縫殿助（永岳）、長野図書允（祐親）の七名が、『御絵御用二付』き『出殿』している」（※括弧内は本稿筆者）こと、そして、「第十一代淑子内親王がこの年十二月二三日に宮家を相続し、翌三年四月二三日に今出川屋敷に移徙しているから、この『御絵御用』は、淑子内親王の移徙に備えてのものと思われる。」ことから、文久二年（一八六二）年における桂宮家相続の際に障壁画が描かれたと指摘した⁸。加えて、台所及び雁の間の雁の間は、『桂宮日記』「嘉永七年四月十四日条」に『雁之間襖御張付御絵も結構に御出来』しているので破損しないように襖は『戸』に取換え、張付は板で覆うようにとの指示が出されている⁹ことから、この時既に障壁画が存在していたとする⁹。

二条離宮への移築に際し、御常御殿は時計回りに九〇度回転し、台所及び雁の間の雁の間は移築前のお清所（現台所）と隣接し、さらに、東側の室にあつた棚と押入を、西側の室に移すという変更が加えられた¹⁰（松本前掲・図1及

び図2参照)。本稿では、可能な限り、移築前の状況、すなわち、障壁画が制作された時点での状況を、復元的に捉えることを目指すため、御常御殿の障壁画は、以下、部屋ごとに、各壁面の初出時に、旧方角を併記する。

一 御常御殿

(一) 松鶴の間

松鶴の間は、御常御殿の南西に位置する。移築前の建物の平面図と考えられる、『桂宮総図』（宮内庁書陵部蔵）には「御座の御間」と記されることから、当主の居室であったと分かる。

まず、東面（旧・北面）に床と違い棚があり、床の貼付には、主に松と水流、鶴が描かれる。松は、画面中央に配され、根元から逆「く」の字の形に幹を伸ばす。違い棚の天袋小襖四面には、金地に鶴六羽が、床のある右へ向かって飛ぶ姿が描かれる。棚の壁貼付は、棚の上に土坡、下に水流があり、その岸边には子目の遊で引かれる小松のような、ごく若い松が生えている。地袋の小襖二面には、岩と、長寿の象徴とされる蓑亀が描かれる。

北面（旧・西面）襖四面（口絵8）は、東面の床に同じく、松と水流、鶴が描かれる。こちらは松が二本、どちらも東より一の襖に根元があるが、手前の松はうねりながら上方に幹を伸ばし、奥の松は、左に幹を伸ばし、その先端は東より四に至る。鶴は成鳥三羽、雛鳥二羽が描かれる。

西面（旧・南面）の腰障子四面には水流が横断し、水中や岩上には亀、岸边には東面と同じ若松が描かれる。南面（旧・東面）の腰障子二面のうち、西より二には若松と根笹が描かれ、東面の床貼付の根笹との繋がりが示唆される。

この部屋の障壁画は、松、鶴、亀という、長寿を象徴する画題で構成される点、当主の御座所の設えに相応しい。加えて、十代当主は四歳、九代当主は二歳で早世しているという桂宮家の状況を踏まえると、当主の長寿を願う、切実な願いが込められたことは想像に難くない。

技法は、紙本着色で、金銀の砂子が蒔かれ、緑青や群青の濃彩と相まって、豪華な雰囲気纏う。また、松の、うねりながら上へ、又は左へと向かう樹形

や、方形を重ねた岩の形態（図1）、松や岩に見られる漢画的な筆致は、筆者とされる狩野永岳（一七九〇〜一八六七）の様式的特徴に合致する。

永岳は、景山洞玉（一七六一〜？、後の狩野永章⁽¹⁴⁾）の子に生まれ、後に京狩野八代当主、狩野永俊（一七六九〜一八一六）の養子となり、文化一三年（一八一六）に九代当主となり、御所や、撰閑家である九条家、彦根藩主井伊家の御用を務めた⁽¹⁵⁾。安政度の御所障壁画制作においては、御常御殿の上段、一の間、皇后常御殿の上の間、御学問所の上段の間等、建物の中で最も格式の高い部屋を担当し、他に諸大夫の殿上人の間等の障壁画を描いていることからも⁽¹⁶⁾、御常御殿の中で最も格式の高い「御座の御間」を担当するに相応しい絵師といえる。

(二) 雉子の間

雉子の間は、松鶴の間に対して、現在は東隣に、移築前には北隣にあった。『桂宮総図』に「御寝の御間」と記されており、当主の寝所とされる。

まず、東面（旧・北面）には、南側から襖と違い棚、壁があり、襖二面には、色づいた紅葉と松が生える遠山が描かれる。遠山は違い棚の壁貼付にも描かれ、違い棚の天袋小襖四面は、金地に小禽七羽が左へ向かって飛ぶ。地袋小襖二面は、胡粉を盛り上げて柴垣を表し、萩と菊が添えられる。北端の壁貼付一面は、霞の向こうに色づいた紅葉と岩があり、紅葉に小禽が止まる。

北面（旧・西面）の襖四面（口絵9）は、紅葉と小禽、雉子が描かれる。紅葉は東より一、二、三に二本あり、手前と奥に、その根元が配される。奥の紅葉は上方へ伸び、手前は左へ屈曲し、東より二で再び折れて上に向かう。紅葉の葉は、東より一、二では赤色、東より三、四では緑色で、季節の移り変わりを示している。

西面（旧・南面）の壁二面は、北側と南側の両端側に小禽が止まる桜を配し、中央の余白には躑躅と雉子の雉子と三羽の雛鳥を描く。これらの桜の描写には、盛り上げ胡粉が用いられる。南側の画面には遠景があり、桜と松の生える遠山が描かれる。

南面（旧・東面）の腰障子四面には、蒲公英、菫、蓮華、土筆など春の草花

が描かれている。

技法は紙本着色で、画面全体に金砂子による霞が漂う。鮮やかな色彩と丸みを帯びた形態によって、春と秋の景物を描くことは、松鶴の間に見られる、不変性の強い画題（松）と漢画的筆法の組み合わせとは対照的である。表（御座所）と奥（寝所）という、部屋の機能の対照性に合わせた、画題と筆法の選択がなされたと考えられる。

他方、雉子の間の北面の襖四面における紅葉の、横方向に長く伸びる樹形や、二本を前後にする配置は、松鶴の間の北面の松の描き方に通じ、さらに、岩の方形を重ねたような形（図2）は、松鶴の間の岩（図1）のそれを簡略化したように見え、構図やモチーフの形態に、松鶴の間との共通点が認められる。

障壁画の筆者とされる長野祐親（生没年未詳）⁽¹⁷⁾は、丹波国出身の人物であり、松鶴の間の筆者、狩野永岳に師事した。波多野姓であったが、長野姓を継ぎ、安政三年（一八五三）八月一二日に図書寮に任官して「従六位上」に叙せられ、同日に「丹波介」、九月一七日には「少允」に任ぜられている。慶應三年（一八六七）八月の「明治天皇即位御道具御用」に参加しているが、詳しい画業は未詳である。⁽¹⁹⁾

（三）四季草花の間

四季草花の間は、松鶴の間の北隣にあり、移築前には西隣に位置した。『桂宮総図』には、「草花ノ間」と記され、移築前の用途は明らかではない。

まず、西面（旧・南面）の腰障子四面は、右、すなわち北側から、土筆、蔦の臺、春蘭、種類不明の黄色と臙脂色の花、蕨、蓮華、蒲公英、葶等、春の草花を描く。

南面（旧・東面）の襖四面（口絵10）と壁貼付一面は、春から夏の草花で、右（西側）から、蒲公英、葶、菜の花、豌豆、蓮華、苧環、芥子、河骨、菖蒲、壁貼付に撫子を描く。

東面（旧・北面）の襖四面（口絵11）は、秋の草花である。右（南側）から薄、桔梗、女郎花、露草、秋海棠、蜀葵、薄、朝顔、薄、竜胆、菊、女郎花、吾亦紅、竜胆を描く。

北面（旧・西面）の腰障子四面は、冬の草花であり、右（東側）からツワブキと鳶を這わせる豆花、菊、水仙を描く。

西面、すなわち旧南面を春とし、四方を四季になぞらえて、反時計廻りに季節がめぐる構成となっている。

技法は、紙本着色で、余白と地面付近を中心に、金銀砂子が蒔かれている。草花（図3）は写生的な描写であり、茎や葉は、一部を除き没骨の淡彩で描かれるため、華やかながらも繊細で、柔らかな雰囲気をたたえる。

障壁画の筆者とされる中島来章（一七九六―一八七一）は、大津または信楽の生まれで、円山応挙（一七三三―一七九五）の弟子、渡辺南岳（一七六七―一八一三）に師事し、南岳没後は、応挙の息子、円山応瑞（一七六六―一八二九）に師事したとされる。⁽²⁰⁾安政度の御所障壁画制作では、御常御殿の小座敷上の間、南廂の杉戸絵、皇太子のための御花御殿の上の間に障壁画を描いた。⁽²¹⁾格式の上では、最高位に次ぐ位置付けの部屋と言え、本丸御殿の御常御殿での部屋の格式に合致する。

（四）耕作の間

耕作の間は、四季草花の間の東隣、移築前には北隣の部屋で、『桂宮総図』には、「耕作ノ間」と記される。

まず、西面（旧・南面）の襖四面（図4）は、北より一、二に、初春の種浸しと種蒔き、北より三、四に田起こしを描く。農作業以外では、茶屋や猿引き、子供、子供連れの女性も描かれる。北より四の中景には、農産物の競りと思われる描写があり、その右側には、青色の着物を着た女性一人が、御供の三人と共に、旅姿で描かれる。⁽²²⁾

南面（旧・東面）の襖四面は、夏の田植えの情景である。田植え作業に従事する人々の他、男女が食べ物を囲んで休憩する場面や、頭に桶を乗せた子供連れの女性、小川に遊ぶ子供達を描かれる。水車を回して田んぼに水を引く男性の姿もある。左端の西より四は、画面の右側に田んぼが少し張り出して描かれているが、画面の多くは余白となっている。

東面（旧・北面）の襖五面（図5）は、秋の収穫の情景を描く。南より一は、

田んぼに案山子等の鳥除けがあり、落雁も描かれる。南より二、三では、稲刈りの作業や、千歯こきで脱穀する作業が描かれる。他に、休憩する男性、彼らに話かける老人の姿もあり、橋の上では、米俵を積んだ牛を男性が引く。南より四では、唐竿を使った脱穀作業、臼、唐箕、万石通しを使った精米作業が行われ、これらの作業をながめる子供の姿もある。小川の向こうでは、米俵が蔵に運び入れられる。南より四には、大津絵のような図柄の絵が陳列された棚店が描かれる。南より五は、米を俵に入れる作業の傍に、烏帽子に狩衣、指貫を着た男性が太鼓あるいは鐘を叩き、犬が後ろについていく。その装束から、歌念仏の様な、歳末の門付けの芸人と思われる。画面の中央にある、門と塀を備えた家の門扉の傍には米俵があり、ここが米の消費地であることが示唆される。室内には機織りをする女性が、勝手口の前には老女がいる(図6)。家屋の前の大木の傍には、祠と、「定」と書かれた立札がある。

北面(旧・西面)の腰障子四面は、精米の情景である。東より二には、水車小屋の中で、米が突かれ精米されている様子が描かれ、外では、男性が馬から米俵を下ろしている。東より三は、水車小屋の水車側を描き、外では、男性が、白い袋が積まれた荷車を引いている。周囲の田んぼは、いずれも刈り入れ後の状態である。

四季草花の間と同様、西面、すなわち旧南面を春としており、四方を四季になぞらえて各季節の耕作の場面を描き、反時計廻りに季節がめぐる構成である。

こうした四季耕作図の起源は古代の中国にあり、一年間の稲作と養蚕・機織りの作業工程を見せ、その苦勞を皇帝や皇太子に知らしめるために誕生した²³。従って、この四季耕作図もまた、桂宮家の当主の御常御殿に描かれるに相応しい画題であると言える。加えて、高貴な立場であることを想起させるような、東面の南より五に描かれる機織りの女性や、子供及び子供連れの女性が多く描き込まれるのは、その受容者が女性当主であることを想定したものと考えられる。

技法は紙本淡彩で、金砂子は見られない。本図の中に描かれる建物や樹木等のモチーフや人物の身体描写に破綻がなく、絵師の技量の高さがうかがえる。筆者とされる中島華陽(二八一三〜一八七七)は、横山崋山(一七八一又は八四一〜一八三七)に師事し、文政度の東本願寺再建にも従事した²⁴。安政度の御

所障壁画制作では、御常御殿の申の口の間、皇后常御殿の西北の間に障壁画を描いた。部屋の格式で言えば、末尾に近い部分にあたる部屋を担当している²⁵。

(五) 萩の間

萩の間は、耕作の間の東隣の部屋で、移築前は北隣に位置していた。『桂宮総図』にも同じ室名で記載される。室名の通り、壁面全体に渡って、紅白の萩が、水流や土坡と共に描かれ、所々に露草も描かれる。以下、各壁面で異なる描写のみ記述する。

まず、西面(旧・南面)の襖四面(図7)は、壁面左下から水流が現れ、最初は右に、次に左に、最後に右というように、ゆるやかに蛇行し、最後は画面の中央付近にフェイドアウトする。左下の土坡には、岩が描かれる。

南面(旧・東面)は、襖三面と壁貼付一面があり、緩やかに右下から左上へ向かう土坡の稜線があり、稜線の頂部付近に岩がある。

東面(旧・北面)の襖四面(図8)は、画面中央やや右で土坡の稜線が交わり、そこに現れる水流は、最初は左、次は右に屈曲し、最後は画面右下にフェイドアウトする。画面中央やや左では、水流の左右が岩場になり、そこから小さな滝となって下に流れ落ちている。

北面(旧・西面)腰障子四面には土坡や水流がなく、萩と露草等、秋の草花が描かれる。

東面は、西面の構図を反転させたような構図となっている。ただし、西面では最初から水面全てが見えるのに対し、東面の水流は、最初は土坡に隠れて見えないが、下へ行くに従ってその姿を現す。そのため、西面は、低い位置にある水流を、東面は、高い位置にある水流を眺めている様に感じる。東面を高地、西面を低地として設定し、南面には、その高低差の繋がりを示すような斜面を描いており、部屋内が、紅白の萩が生える水辺に見立てられていると考えられる。

技法は紙本着色で、耕作の間と同様、金砂子等は見られない。萩(図9)や露草は写生をふまえた没骨で描かれ、他方、岩(図10)の輪郭線は太く、淡い調子ではあるが皺が入り、点苔も描かれる。余白を多くとり、洒脱な雰囲気がある一方で、西面と東面の構図を鏡面関係にするなど、構造的な志向も感じら

れる。

筆者とされる八木奇峰（一八〇六～七一）は、近江国出身で、最初、京狩野の山懸岐鳳（一七七六～一八四七）に、後に、四条派の松村景文（一七七九～一八四三）に師事したとされる⁽²⁶⁾。草花の写生的な描写には円山派の、余白の多さには四条派の、また、岩の描き方や構造的な構図には京狩野の影響が看取される。安政度の御所障壁画制作では、皇后常御殿の西南の間、御花御殿の西の間に障壁画を描いた。御所全体でみれば、最高位である御常御殿に次ぐ建物だが、部屋の様式としては高くない⁽²⁷⁾。奇峰の詳しい経歴等については、本誌掲載の松本直子「作品介绍】旧二条離宮（二条城）本丸御殿の障壁画 玄関、御書院」も参照されたい。

（六）二階御座所 違い棚の天袋と地袋

御常御殿二階の御座所の北面（旧・西面）には違い棚と床があり、その天袋と地袋の小襖各二面に障壁画が描かれる。天袋（図11）には小禽五羽が、床のある左（西側）へ向かって飛ぶ姿が描かれる。地袋（図12）には、紅梅が屈曲しながら幹や枝を伸ばし、枝には小禽が二羽、互いに視線を交わしている。

技法は、紙本着色で、金砂子が蒔かれている。筆者とされるのは、雉子の間と同じ長野祐親で、丸みを帯びた小禽の姿や、凹凸の少ない樹木の描き方は、雉子の間の小禽や紅葉に共通する。

（七）杉戸絵

御常御殿の杉戸絵二枚四面は、現状、御書院と御常御殿を繋ぐ渡り廊下と、御常御殿北廊下との境にある。移築前も同じく御書院と御常御殿との渡り廊下に設置されていたが、この時点での渡り廊下は、御書院の東側と御常御殿の西北隅に繋がっていた（松本前掲・図2参照）ため、現在と状況が異なることは分かるが、その詳しい位置は分からない。

渡り廊下側（北側）の二面（図13）は、薔薇と仔犬を描く。薔薇は二本、いずれも根元は左側の画面にあり、右上方へ向かって伸び、円弧を描いて下降する。薔薇の下には仔犬が七匹描かれる。御常御殿側（南側）の二面（図14）に

は、うち右側一面に花籠が描かれ、朝顔、女郎花、牡丹、水仙、菊、花菖蒲が入る。花菖蒲の後方には梅が伸び、左側の画面で枝を垂らしている。

技法はいずれも板絵に着色。仔犬（図15）は、表情豊かで愛らしい姿が、応挙風の、丸みを帯びた形態で描かれる。南側の花籠の花々（図16）や、北側の薔薇には、明瞭な輪郭線を持ちつつも、葉の裏や横から見た姿を描く、写実的な態度が見える。筆者とされる五井友山（生没年未詳）は、絵の特徴から、円山派や、そこから派生した画派に学んだ可能性は高く、優れた技量を持っているが、管見では、作品を含め他の資料を見つけられておらず、画業の解明は今後の課題である。

二 台所及び雁の間

雁の間は、東側と西側の二室がある。「はじめに」で述べた通り、移築前後で棚と押し入れが移動しており、障壁画にも、それに伴うものと思われる紙継等の痕跡が見られるが、どこを、どのように変更したのかは今後の課題とし、以下では、現状の部屋の位置と方角で障壁画について記述する。

（一）雁の間 東

西面の襖四面に、雁一羽が水に半身を浸け、右へ向かって泳ぐ姿と芦を描く。北面は壁貼付一面と戸襖四面があり、合わせて五面のうち東より四には、飛翔しながら左右に交差する雁二羽、東より二には右へ向かって飛ぶ雁一羽がいる。東面（図17）の壁貼付三面には、右に向かつて飛立つ雁二羽と芦を描き、南面は、東側の壁貼付一面に芦が描かれるが、残る腰障子四面に障壁画はない。

（二）雁の間 西

西側の雁の間の西面は、南側に棚、北側に襖二面があり、棚の上部の壁貼付には、襖の方向に向かつて飛ぶ雁二羽を描く。棚の下部の壁貼付は、右下に水流の線があり、その線は北側の袖壁の左下に繋がる。襖二面には岩場と、その上に二羽の雁を描く。うち一羽は、左上を見上げ、視線の先には棚の上部の壁

貼付に描かれた、飛来する雁がいる。北面の戸襖四面には、東より一、二に芦を描くのみである。東面の襖四面(図18)は、西面と同様、岩場の上に雁を描き、雁が見上げる先に、飛来する一羽の雁を描く。

雁は渡り鳥であり、秋に北方から日本へ渡って冬を越し、春になると、北方へ帰っていく。このことを踏まえると、西の雁の間は、北方から雁が飛んでくる秋の光景、東の雁の間は、泳ぎ、又は飛び立つ姿から、雁が北方へと帰っていく春の光景と捉えられる。

雁の間二室の障壁画は、水墨の技法で描かれる。筆者とされる中島来章は、先述のとおり、御常御殿の四季草花の間の障壁画も描いている。飛び、泳ぎ、または岩上に佇む雁を、のびやかに、また、写実を踏まえながら、的確な墨線で表現する本図(図19)は、来章の高い画力を示す好例と言えよう。

おわりに

この様に、御常御殿六室と杉戸絵、台所及び雁の間の雁の間に描かれた障壁画を概観すると、部屋の格式や用途に合わせた画題、技法、筆者が選ばれていることが分かる。

また、画題の点では、松鶴の間の鶴、雉子の間の雉子は、いずれも成鳥と共に雛鳥を描き、耕作の間には子供や母子が多く確認できる。耕作の間には、高貴な女性の受容者が想定される図像が確認できることから、先行研究が述べる様に、御常御殿の障壁画制作が、文久二年(一八六二)年の淑子内親王の桂宮家相続を契機としている可能性は、非常に高いと言えるだろう。

これらの障壁画を描いた筆者は、五井友山と長野祐親を除く全員が、安政度御所障壁画制作に参加した、当代におけるトップクラスの絵師達であり、これらの障壁画からは、彼らの技量の高さをうかがうことができる。惜しまれるのは、近世絵画と近代絵画の狭間にある彼らの画業に対する評価が、現在、必ずしも高くはないことであろう。彼らの画業の詳細を調べ、その価値を明らかにしていくことは、今後の大きな課題である。

【注】

(1) 国立国会図書館所蔵、長崎省吾関係文書のうち「号外ノ一」と書かれた袋に入った文書で、そのうち『桂宮』と表紙に記される文書は、桂宮御殿の各室に描かれた障壁画の画題と筆者を記す。二條離宮に移されていない障壁画についても記載があることから、移築前の桂宮御殿の様子を記述したものと考えられる。

(2) 本丸御殿障壁画の画題、様式、筆者を総覧した武田恒夫「本丸御殿障壁画」(『元離宮二條城』小学館、一九七四)は、筆者名を、この『京都御所離宮誌』に依拠し、筆者名を筆者と制作年代を考察した西和夫、津田良樹、小沢朝江「二條城本丸旧桂宮御殿の造営と障壁画について―桂宮家御殿の造営と御出入絵師(一)―」(『一九九〇年度 日本建築学会 関東支部研究報告集』)は、筆者名について武田氏の見解を継ぎながら、『桂宮日記』の記述をもとに筆者の考察を行っている。

(3) 荒井朝江、西和夫「二條城本丸旧桂宮御殿の前身建物とその造営年代について―桂宮家石薬師屋敷寛政度造営建物と今出川屋敷への移築―」(『日本建築学会計画系論文報告集』第三八七号、一九八八、一四七頁)

(4) 荒井朝江、西和夫一九八八、一四六―七頁

(5) 荒井朝江、西和夫一九八八、一四八頁

(6) 荒井朝江、西和夫一九八八、一四七―八頁

(7) 西和夫、津田良樹、小沢朝江「二條城本丸旧桂宮御殿の造営と障壁画について―桂宮家御殿の造営と御出入絵師(一)―」(『一九九〇年度 日本建築学会 関東支部研究報告集』三二八頁)

(8) 西和夫、津田良樹、小沢朝江一九九〇、三二七頁

(9) 西和夫、津田良樹、小沢朝江一九九〇、三二八頁

(10) 「二、概説／一 創立及び沿革」と「四、調査事項／四 移築に伴う改変」『重要文化財二條城本丸御殿 御常御殿 修理工事報告書』第八集(元離宮二條城事務所、一九九〇)二頁と六〇頁

(11) 「一形式及び規模／一、構造形式／天井／雁の間」『重要文化財二條城本丸御殿 御書院 台所・雁の間 修理工事報告書』第六集(元離宮二條城事務所、

- 一九八四）六頁
- (12) 本論で方向を記す場合、向かって左を「左」、向かって右を「右」として記す。
- (13) 荒井朝江、西和夫一九八八、一四六〜七頁
- (14) 景山洞玉（狩野永章）の生年については大原由佳子「狩野永章筆『龍図』『天下和順図』について」『滋賀県立近代美術館 平成三〇年度紀要』滋賀県立近代美術館、二〇一九、七九〜八〇頁）を参照した。
- (15) 小寄善通「狩野永岳／画家解説」『京の絵師は百花繚乱―『平安人物誌』にみる江戸時代の京都画壇―』京都文化博物館、一九九八、二七四頁
- (16) 毎日新聞社編、発行『皇室の至宝七 御物 障屏・調度Ⅱ』一九九二、二〇七、二二六頁、同『皇室の至宝八 御物 障屏・調度Ⅲ』一九九二、二〇九頁
- (17) 兵庫県丹波市在住の芦田典子氏が、波多野嘉右衛門の墓の碑文を調査したところ、この碑は、長野祐親が、実父、波多野嘉右衛門のために一八六九年に建立したものであることが分かった。碑文に祐親は自らについて、「幼き頃より画を好み、二十歳前後の若い頃、京都やその近国に遊学し、狩野永岳に師事して年月を過ごした」こと、「安政三年八月、故あって長野氏を継ぎ図書寮の官に任じられ丹波介従六位上に叙せられた」ことを記している（二〇二一年五月十五日、神戸新聞NEXT URL: <https://www.kobe-np.co.jp/news/tanabe/202105/0014327035.shtml>）。
- (18) 「地下家伝 第八」、三上景文著、正宗敦夫校・編『地下家伝』第八〜一三（日本古典全集…第六期、日本古典全集刊行会、一九三七）三八八頁
- (19) 福田道宏「宮廷御用の幕末」『京都造形芸術大学紀要』一八号、二〇一四、九九頁
- (20) 國賀由美子「中島来章」石丸正運編『近江の画人―海北友松から小椋遊亀まで―』サンライズ出版、二〇二〇、六八頁
- (21) 毎日新聞社編、発行『皇室の至宝七 御物 障屏・調度Ⅱ』一九九二、二〇七頁、同『皇室の至宝八 御物 障屏・調度Ⅲ』一九九二、一三七頁
- (22) この旅姿の女性とお供について、筆者は当初、淑子内親王の受容を想定したものと考えていたが、華陽の師、横山崋山の《四季耕作図屏風》（『特別展 横山崋山』展図録、二〇一九、京都文化博物館、図八七）においても同じ様な
 画像が確認されたため、この画像は師弟関係を通して継承された可能性が高いと判断した。
- (23) 岩崎竹彦「一、中国耕織図の流れ／序章 四季耕作図の源流」冷泉為人、河野通明、岩崎竹彦『瑞穂の国・日本―四季耕作図の世界―』淡交社、一九九六、四頁
- (24) 岩佐伸一「中島華陽／画家解説」『京の絵師は百花繚乱―『平安人物誌』にみる江戸時代の京都画壇―』京都文化博物館、一九九八、二八七頁
- (25) 毎日新聞社編、発行『皇室の至宝七 御物 障屏・調度Ⅱ』一九九二、二〇七、二二六頁
- (26) 森岡榮一「八木奇峰」石丸正運編『近江の画人―海北友松から小椋遊亀まで―』サンライズ出版、二〇二〇、一〇二頁
- (27) 毎日新聞社編、発行『皇室の至宝七 御物 障屏・調度Ⅱ』一九九二、二二六頁、同『皇室の至宝八 御物 障屏・調度Ⅲ』一九九二、一三七頁
- (28) 長崎省吾関係文書『桂宮』に「一 従常御殿御書院間廊下」に、当該杉戸の画題と筆者名が書かれている。

図版



図1 御常御殿 松鶴の間 北面 東より1 (部分)

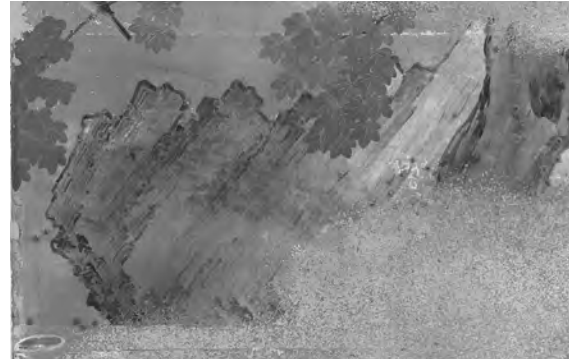


図2 御常御殿 雉子の間 東面 北より1 (部分)



図3 御常御殿 四季草花の間 東面 南より3 (部分)



図6 御常御殿 耕作の間 東面 南より5 (部分)



図4 御常御殿 耕作の間 西面 襖4面



図5 御常御殿 耕作の間 東面 襖5面



図7 御常御殿 萩の間 西面 襖4面

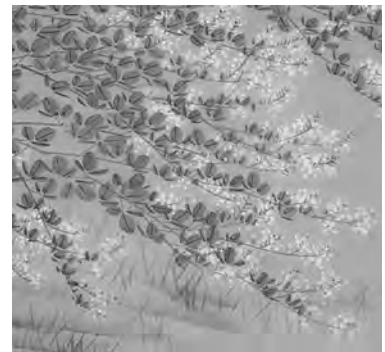


図9 御常御殿 萩の間
南面 西より3（部分）



図8 御常御殿 萩の間 東面 襖4面



図10 御常御殿 萩の間
西面 北より4（部分）

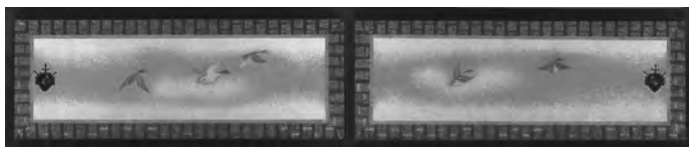


図11 御常御殿 2階 御座所 天袋小襖2面

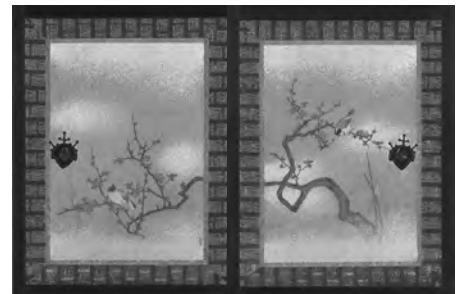


図12 御常御殿 2階 御座所
地袋小襖2面



図13 御常御殿 渡廊下北廊下境 杉戸絵 北側2面



図14 御常御殿 渡廊下北廊下境 杉戸絵
南側2面

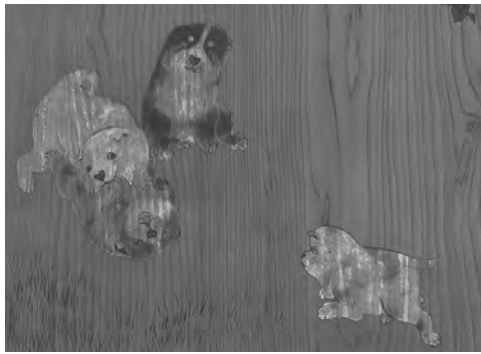


図15 御常御殿 渡廊下北廊下境 杉戸絵
北側2面(部分)



図16 御常御殿 渡廊下北廊下境 杉戸絵
南側2面(部分)

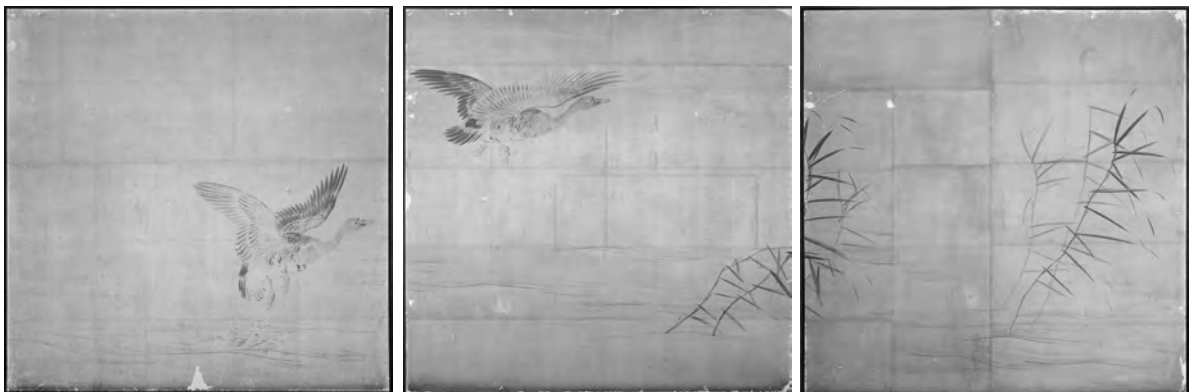


図17 台所及び雁の間 雁の間 東 東面 壁貼付3面



図18 台所及び雁の間 雁の間 西 東面 襖4面



図19 左: 雁の間(東) 東面 南より3(部分) 右: 雁の間(西) 東面 南より1